

八月を過ぎて思う

暦の上では初秋を過ぎ、学校周辺では早くもキバナコスモス *Cosmos sulphureus* の咲く頃となりました。とは言え、日々厳しき残暑が続いていますが、放課後ともなれば週末に開催の第 37 回聖祭に向けて生徒達の練習に励んでいる姿や明るい声が溢れています。

ところで、この夏には『ある男』『レ・ミゼラブル』『四月は君の嘘』と 3 つのミュージカル、6 本の映画を鑑賞しました。過ぎてみれば、読書はもちろんのこと、例年にも増して戦後 80 年に絡めて戦争に因んだ作品にたくさん触れた夏でした。映画では、『夏の砂の上』『長崎―閃光の影で―』そして 5 日から公開された『遠い山なみの光』と、長崎を舞台にした作品をたくさん見ました。『遠い山なみの光』は、長崎出身で世界で活躍する作家カズオ・イシグロによる原作を元に、『ある男』でメガホンを取った石川 健監督による作品です。なんとと言っても、広瀬 すずの感情を込めた演技が光ります。いずれの私が行ったシネマ館ではエンドロールが終わって明かりが灯るまで誰も席を立つ人はおらず、観客は皆、作品の持つメッセージと余韻に浸っていました。

また、聞き書きをまとめた小品『わたし 96 歳が語る 16 歳の夏』は、戦後 75 年、やっと「カタリベ」としての自覚に目覚めた母が重い口を開いて発する言葉を娘がまとめた労作です。「雨がきらい」と言う母の言葉に重さを感じざるを得ません。長崎出身の歌手・福山 雅治はインタビューの中で「私にとって八月と言え、原爆」と語り、今でも先達たちの経験した事実を語り継ぐことの大切さを述べています。彼は、黒焦げになりながらも耐え抜いた片足鳥居で知られる山王神社のクスノキに、生命の尊さや平和への願いを込めて『クスノキ』という楽曲に仕上げています。歌詞の中でも、雨は大きな意味を持っています。

夏の終わりには、たまたま買い求めた『ミス・サンシャイン』も主人公の女性が長崎で体験した被爆がベースとなっており、この往年の大女優との淡い交流、その生い立ちに秘められたヒミツを描いた作品です。作者は、今夏の大ヒット映画『国宝』の原作を著した吉田 修一で、とても読みやすい物語です。他にも、長崎に行けば必ず登場する永井隆のことや林京子さんの作品も忘れられません。

今年の中学生対象の夏の特別講座『“歴史”をみつめる意味をみんな考えよう in 長崎』では、長崎を訪問して現地の方々からお話を聞くと同時に、活水高等学校を訪問して平和学習部との交流会を行い多くを学ぶことができたということです。この研修による成果の一部は、週末の文化祭で展示いたします。

参考

- *カズオ・イシグロ、小野寺 健訳 (2001,org.1982) 『遠い山なみの光 A Pale View of Hills』 ハヤカワ epi 文庫, 275 ページ.
- *吉田 修一 (2025) 『ミス・サンシャイン』 文春文庫, 256 ページ.
- *吉田 修一 (2021) 『国宝』 朝日文庫, 上:407 ページ+下: 432 ページ.
- *林 京子 (1988) 『祭りの場』 講談社文芸文庫, 398 ページ.
- *永井 隆 (2009, 初版 1949) 『長崎の鐘』 日本ブックエース, 287 ページ.
- *作詞:福山 雅治, 作曲:福山 雅治, 編曲:井上 鑑,福山 雅治 (2014) 『クスノキ』